

# 金魚のまぶた

太 田 眞 美

「まぶたのある魚は獲っちゃいけん。彼らも元は、人間だでの」  
海でも、川でも、溜め池でも。

大自然に生きる魚たちに触れるときは、必ず大人にそう言われる。言葉がまだ覚束ないような頃から言い含められた子どもたちは、友達と遊ぶとき、合言葉のようにそれを唱える。知らないで獲ってしまうような不幸な子がないように。そして大きくなった子どもたちは、自分の子どもにも、同じように言って聞かせる。

——まぶたのある魚は獲っちゃだめだよ。彼らも、元は人間なのだから。

【前半のあらすじ】

下山夏樹しもやまなつきは三年前に東京から手ノ町に越してきた小学五年生。

町に伝わる「人が魚になる」という人魚の秘薬と人魚伝説に興味

を持ち、親友の五百川基（いお）、クラスメイトの樫木翠子さきわくこ（コト）を巻き込んで、夏休みの自由研究として「人が魚になる」というそれを再現しようと試みる。

彼らは金魚屋と呼ばれる雑貨店や、古民家を資料館にした樫木屋敷といった場所を駆け回り、伝説の秘薬について資料を集め、屋敷の蔵から勝手に持ち出した手記を頼りに薬を完成させる。出来上がった薬を三人で飲んでみるが、夏樹もコトもその効果を本気で信じてはいなかった。

薬はいおが持ち帰ることになった。いおは一年前から急に泳げなくなっていたが、以前は水泳の名手と謳われていた。しかし薬を飲んだ後再び泳げるようになったいおは、「飲みすぎると魚になる」と言われているこの秘薬をこっそりと飲み続けるようになる。

何も知らない夏樹やコトらはいおの復調を喜ぶが、薬を使います

きたいおは、水泳大会の最中に魚になってしまふ。いおを元に戻そうとする夏樹は、祭で金魚すくい忌避されていたことを思い出す。それは「陸に上げられたまぶたのある魚は人に戻るが干からびて死んでしまふ、その際尾びれに触った者も魚になって干からびてしまふ」という伝説に基づくものだった。

校門を抜け、昇降口にある時計をちらりと見遣ると、三時を少し過ぎたあたりだった。敷地内でも時折他校の児童とすれ違ふが、夏樹の学校の児童は見かけない。大方、校舎内で何かやっているんだろう、と夏樹は思った。

大急ぎでプールの入口に駆けつけると、幸いなことに、扉に鍵はかけられていなかった。そのまますりりと体を滑り込ませ、靴を脱いで忍び足でプールサイドまで向かう。途中シャワーの壁や腰洗い槽の陰に隠れて様子を窺うが、がらんとして誰かがいるような気配はなかった。ポンプ室の方からは相変わらず、どどどどと大量の水を循環させる音だけが響いている。

夏樹は生ぬるい水たまりを踏んでプールに近寄った。聞こえるかは分からないが、いおの名前を小声で呼びながら水の中を目で探る。最初に魚を見かけた紺色の線を辿ってみるが、それらしき影はない。まさか吸水口に吸い込まれてしまったのだろうか？ 心

配になってその辺りを重点的に探してみるが、一向に見当たらない。

「いお、いお！ いるんなら出てきてくれよ！ 俺だよ、夏樹だよ！」

小さく呼びかけながら水面をばしゃばしゃと叩いてみるが、水の音が虚しくこだまただけだ。午後の生ぬるい風が吹いて、木の葉をざわざわと揺らす。しかし、葉擦れの音と遠くで響くポンプ室の音に紛れるように、ちゃばんという微かな水音が聞こえた。そしてしばらくしないうちに、隅の目立たないところに配置してある吐水口の陰から、白い魚がゆるゆると泳ぎ出てきた。魚は夏樹の前で止まると、その場でくるくると旋回するように泳ぎはじめた。

「お前、いおなの？」

水面に向かって問いかけてみると、白い魚は水面に鼻面を寄せてばくばくと口を開けた。

その時、ぎいっとフェンスの扉が開く音がして、魚はびゅんとヒレを翻して水中に潜っていった。夏樹もとっさにシャワーの壁の陰に隠れた。背中をびったりと壁につけ、じっと息を殺してやり過ごそうとする。

「夏樹、いる？」

声の主はコトだった。夏樹はホッとして、壁の上から顔を出した。「こつちだよ」と小声で呼ぶと、コトはプールサイドに上がってくる。手にはプラスチック製の小さな水槽を提げていた。

「いお、コトが来た。ちょっと出てきてくれよ」

呼びかけてみると、さつきまでプールの底をびゅんびゅん逃げるように泳ぎ回っていた魚が、ぷかりと水面に白い背中を現わした。水面に顔を向けて、さつきと同じように口をばくばくさせている。

「いお……？ これ本当にいおなの？ まばたきできる？」

コトは水たまりを避けて水際にしゃがみ込んだ。夏樹も覗き込むようにして魚の顔を窺うと、白い色をした薄いまぶたが二回、ぱち、ぱち、と銀色の目玉を覆った。

「こいつがいおで間違いないよ。言葉だつて分かってるんだし」

「まっつて、これが最後。きみの名前は五百川基？ あつているなら三回まばたきをして」

コトがそう言うのと、白い魚は間髪入れずにぱち、ぱち、ぱち、と目をしばたたいた。それからなんだか忙しない様子でその場をぐるぐると旋回しはじめる。

「本当に、これがいおなんだ……」

「そうだよ。ほら、早く水槽に入れねえと」

呆けたように漏らすコトの背を叩くと、ハッとした彼女が自分の頬をびしょんと叩いた音が聞こえた。

「うん、よし。ちょっと待ってて、いお。とりあえずここから移動しないと」

両の頬を少しだけ赤くしたコトが水槽に水を張る。夏樹は壁の陰に隠れて外の様子を見張っている。まだ先生たちが鍵を閉めに来るような様子はない。

「夏樹、そこに掛けてある大きい網取つて」

コトはすぐ近くのフェンスに立て掛けてあつた落ち葉掬い用の大きなネットを指さした。柄の尻からネットの先まで、夏樹の身長と同じくらいある。これであの小さな魚を掬おうというのは、少々取り回しが大変そうだ。

「わざわざそんなことしないでも、水槽で掬えばいいんじゃないの？」

「想像より大きい魚だったんだ。それだと傷つけちゃうかもしれない」

「わかったよ」

立て掛けてあつたネットは、長さに反してとても軽かった。網の中に入っていた落ち葉を外に捨て、コトに渡そうとしたところで夏樹の頭をふとよぎるものがあつた。

「なあ、コト。これでその魚掬ったら、元に戻ったりしないかな？」

コトもピンとくるものがあつたようで、夏樹の持つている網をじつと見つめた。

「……金魚すくいの？」

「おう。あの伝説じゃあ、男が魚になった妻を釣り上げたら、人間に戻ったんだよな？　で、金魚すくいがダメっていうくらいなら、この網で掬っても魚は人間に戻るんじゃないかって思うんだよ」

「やつてみる？　干からびて死んじゃったっていうオチが、ものすごく気になるけど」

「陸が嫌で嫌で仕方なかったから、干からびちまったのかもしいないだろ。とにかくやつてみる価値はある、と俺は思う」

コトは一瞬だけ躊躇いを見せたあと、こくりと首を縦に振った。「うん、わかった。ぐずぐずしてても仕方ないもんね。やろうか」

夏樹は頷くと、網をそつとプールの中に差し入れた。目の細かい、青いネットがふわふわと揺れて、プールの底にやんわりとした影を落す。いくらネットが水を通すとはいえ、手応えがぐつと重くなった。重さに振り回されないようにしつかりと柄を握り直し、いおがネットの枠の中心にいられるように調整すると、夏樹

はそつと網を持ち上げた。

——戻れ、戻れ、戻れ！

ばしやりと音を立てて掬い上げられたネットの先では、いおが——白い魚がその身を踊らせていた。

ダメだったか、と一瞬落胆に駆られるものの、すぐさまコトが水槽を差し出してくる。夏樹は柄を手繰り寄せ、もだもたとわだかまるネットの中から白い魚をかき分ける。コトが持つている水槽を引き寄せるように縁に手をかけ、魚に触らないようにネットを引っ張って魚を水槽の中に落としてやる。しかしその瞬間、今の今まで大人しくしていた魚がえらを一際大きく膨らませ、びちびちと跳ねた。

「うわっ！」

夏樹は驚いて網を手放してしまった。しまったと思ったときには遅く、カツーンと高い音を立てて、網はコンクリートのプールサイドに転がった。手元が狂って白い魚はべちりと夏樹の手を叩き、その弾みでぼちゃんと水槽の中に落ちる。辺りに静寂が戻ってきて、夏樹はほつと息をついた。コトも水槽を持つていてくれなければ、きつと取り落としていただろう。

「びつくりした……いおは？　無事？」

「お……うん、無事っぽい」

中でゆらゆらと泳いでいる魚が見えるように、水槽をコトに渡す。コトはそれを両手で受け取ると、黒い蓋をばちりと嵌めた。いったんそれを脇に寄せて置くと、転がっているごみ取りネットを拾って元の場所に立て掛けた。

「一応聞くけど、触ってないよね？」

「……うん、大丈夫。だと思っ」

コトが夏樹の左手を覗き込む。夏樹自身、魚が手に触れたような気はしたが、尾びれが当たったかと言われるとどうにも判然としない。それに、ぬるりと張り付くような感触こそ残っていたものの、夏樹の左手には水滴なんてこれっぽっちもついていなかったのだ。なんだか白昼夢を見ていたような気さえしてくる。

夏樹の左手を解放し、さて、これからどうしよう、とコトが言ったところで、後ろからガシャン、と音がした。まさか水槽が倒れたのかと慌てて振り返ったところで、夏樹の目に飛び込んできたのは我が目を疑うような光景だった。

いおが、人間の姿でその場にへたり込んでいた。今し方水から上がってきたばかりのように全身がずぶ濡れで、気管に水が入ったのか、顔を伏せてげほげと咳き込んでいる。その少し後ろには、何かにはじき飛ばされたようにヒビの入った水槽が転がっていた。

二人はその場に凍りついたように、ただ呆然と立っていることしかできなかった。

「あの、……えっと」

いおが顔を伏せたまま、あたふたと視線を彷徨わせているのが分かる。咳は止まったもののまだ本調子でないらしく、哽れた老婆のような声だった。

「あの、……お手数、おかけしました……」

安堵感、罪悪感、羞恥心、申し訳なき——どんな言葉言えばいいのかも分からない。そんな色々な感情がないまぜになった微妙な顔をして、いおが二人を見上げた。しかし相変わらず、二人はいおを凝視したまま、びくりとも動かない。

「……どうしたの、二人とも」

反応がないので不安になったのか、おずおずといおが訊ねてきた。夏樹は何と言っていいものか分からず、慎重に言葉を選びながら聞き返した。

「お前こそ、どうしたんだよ、それ」

夏樹が自分の肩を指で示した。それにつられるように、いおも自分の肩を見下ろす。

「ああ……」

いおは自分の身体を見ても別段驚く様子も見せなかった。

いおの腕や胸、脚にはびつしりと、水晶のような魚の鱗がついたままだったのだ。

三人はその足でいおの家に向かった。家には誰もいないらしいが、今日に限ってそれは幸いなことだった。樫木屋敷から持ち帰った資料を三人で手分けしてさらった。見つかったのは殆どがそのまま干からびて死んでしまった話か、魚になって海で暮らす話だった。やっと見つけた他の話は、魚のまぶたを食わせて人間に戻すというものだった。

だがそのためには、まぶたのある魚を見つけ、とらえなければならぬ。時間だけがどんどん過ぎていき、時計を見れば既に五時を過ぎていた。心なしか太陽の光も色味を帯びてきて、その色が更に彼らの心を急ぎ立てる。もう、打てる手だては何もない。じりじりと焦燥だけが募りはじめたそのとき、コトは意を決したように立ち上がった。

「爺ちゃんのところに行こう。もう私たちだけじゃ無理だ。全部話して相談するしかないよ」  
言うが速いか、床に散乱させた資料をまとめて、いおのリユツクの中に全部詰めてしまった。いおと夏樹も言葉なく頷いて、荷物をまとめてコトにしたがった。

いおに長袖の上着を着せて、コトに連れられて辿り着いたのは、二階建ての一軒家だった。樫木屋敷の向かいの山の中腹にあって、山茶花の垣根で家の敷地をぐるっと囲っている。玄関ポーチは三段くらいの階段になっていて、ケイトウやクジャクサボテンの大きな鉢植えが両脇に並べてあった。コトはその階段を一段飛ばしに駆け上がっていくと、乱暴にインターホンを数回押した。ピンポンピンポンと鳴り響く電子音が消えないうちに、コトは焦れたように引き戸の玄関扉をドンドンと叩いた。

「爺ちゃん、婆ちゃん！ いたら開けて！」

コトが家の中に向かって叫ぶと、磨りガラスの向こうに白い人影が現われて、ガラガラと扉が開いた。

「忙しないなあ。どうした、そんなに慌てて」

出迎えてくれたのは樫木爺さんだった。庭いじりをしていたように、ポロシヤツの端に小さな木の葉がいくつか付いている。

「爺ちゃん、ごめん、相談なんだけど……」

コトが二人を玄関に押し込んで扉を閉めた。目配せすると、いおはおずおずと、羽織ったパーカーの袖を捲った。相変わらず、腕には透明の細かい鱗がびつしりと張り付いている。それどころか、最初に見たときよりも鱗で覆われている箇所が広がっているような気もする。それを一目見るや否や、爺さんの穏やかだった

表情が一変して、まなじりをキツと吊り上げた険しい顔になった。

「こんのバカタレが！」

固いゲンコツが順番に、三人の頭に落とされる。ゴツ、ゴツ、ゴチン、と音がして、夏樹の目の前に、一瞬星が飛んだ。

「人魚葉なんか作りおったか！ 悪方キどもめ、蔵のモン勝手に持ち出しよって！」

物凄い剣幕で怒られて、出かかっていた「ごめんなさい」の一言も、喉の奥に張り付いて置き去りになってしまった。

「どうしたんですか清さん、そんな大声出して……それに人魚葉って」

騒ぎを聞きつけて、奥からコトの婆さんもやってきた。夏樹はその顔に見覚えがあった。初めに樫木屋敷に行ったときに、受付にいたお婆さんだ。夏樹とおを見るなり「あらあ、二人ともお久しぶりね。こんばんは」と丁寧にお辞儀をしてくれるので、夏樹とおも消え入りそうな小さい声で「こんばんは」と返すのだった。樫木婆さんはいおの腕を見ると、細い目をぱつと見開いて「あらまあ大変」とこぼした。婆さんの登場で気を削がれたのか、爺さんは「電話してくる」とだけ言い残し、家の中に引つ込んでしまった。

爺さんがいなくなって、玄関がシンとした静寂に包まれる。夏

樹は無意識に詰めていた息をふつと吐き出した。途端に目尻がじわつと熱くなって、喉の奥が紐で縛られてしまったように苦しくなる。ゲンコツを落されてジンジンと痛む後頭部よりも、そっちのほうがかかった。今更のように、どうしようもない後悔が押し寄せてくる。

「……ごめんなさい。こんなことになるって思ってたんだ」

一つぼろりと転がり出ると、続けてあとの二人からも謝罪の言葉がぼろぼろと溢れてくる。しかし樫木婆さんは柔らかな表情のまま「そんなことはいいのよ、今更後悔したってどうしようもないんだからね」とぼつさり切り捨てた。

「今日は帰って明日もう一度いらっしやい。詳しいことは明日話します。お爺ちゃんも色々と伝を当たってくれると思うし。ただ、本来人魚葉は泳げるようになるための葉じゃないの。それを履き違えてしまったのね。どうかしてあげたいけど、治ると約束はできないわ」

帰り道、夏樹とコトはいおを家まで送り届けることにした。

そのあいだ、誰も何も話さなかった。夏樹とコトの二人は青い顔をして固まっただけで、いおは俯きがちなせいでどんな表情をし

ているか分からない。しかし、当の本人は落ち着いた様子で樫木婆さんの話を聞いていたように思う。むしろ、その表情は落ち着きを通り越して穏やかにすら見えたくらいだ。

いおは「また明日」と言つて玄關扉の向こう側に消えていく。二人も同じように返すのだが、夏樹にはどうも言葉が上滑りしているようにしか聞こえなかった。

夏樹はその晩、夢を見た。見たこともないお姉さんといおが、水の底でとても親しそうに話している夢。

遠目からみたつて、その人はとてもきれいだつた。白い袖無しタートルネックに、ふくらはぎまである黒い麻のスカート。そこから伸びた手足はすらりとしていて、月影に照らされた百合の花びらのように、ぼうつと輝いてすら見える。腰まで届く緑の黒髪は水に遊ばせて、ふつくらとした唇はほんのりと赤く色づいている。

いおが何か言つと、彼女は嬉しそうに笑う。何を言っているかなんて分からないけれど、涼しげな目元にきゅつとしわを寄せ、口元に手を添えて、くふくふと幸せを温めるように笑うのだ。そのたびに、華奢な手首に巻き付けられた腕飾り——赤い珊瑚が一粒だけついたそれがふわふわと揺蕩っている。

夏樹がぼうつと見惚れていると、ふと彼女は夏樹に気づいたように視線をこちらに投げて寄越した。目が合つた夏樹はどきりとして、高ぶつた気持ちのまま目を凝らして彼女をじつと見つめた。彼女はおかしそうに笑つて、口をばくばくと動かして何か夏樹に話しかけてくる。形の良い唇が動くたび、こぼり、こぼりと小さな泡が口の端から溢れていく。遠すぎて何を言っているのか分からないけれど、夏樹は彼女の唇に合わせて自分の口を動かしていく。

——あ、ん、た、の、せ、い、よ

そう言っていることが分かつた瞬間、彼女は夏樹に微笑むと軽く手を振つた。夏樹は高鳴つたままの心臓を、一番高いところできゅつと握りしめられたような心地がした。彼女の表情はいおに向けられている穏やかなそれと変わらない。なのに、その笑顔が、少しだけ持ち上げられた口の端が、なんだかとても恐ろしいもののように思えて仕方なかった。

そのとき、いおが彼女の様子に気づいてこちらを見ようとした。彼女は夏樹からふいと視線をそむけて、辺りを見ようとするいおの頭を白い手でそうつと止めた。そのまま撫でるように肩へと手を置いて、ぐ、といおを抱き寄せたところで、はたと目が覚めた。背中にはじつとりと汗をかいていて、心臓は、まだドキドキと



やかましく脈打っている。何だか全身がぶわぶわとして落ち着かない感じがした。

時計を見ると、夜中の二時を回ったところだった。顔でも洗ってからもう一眠りしようかと洗面所に立ったところで——夏樹はぎよっとして固まってしまった。

鏡の中の夏樹の腕には、いおと同じようにきらきらとした魚の鱗が生え始めていた。驚いて腕を引つ込めると、肘を思い切り壁にぶつけてしまう。

「あでっ！」

ゴツン、という大きな音と、じいんとした痺れが腕全体に広がってゆく。涙目で左肘を押さえ、一、二度ひっくり返して見てみるが、夏樹の肩にくっついているのはなんの変わりもない腕だ。しかし、何でもないように見えるそこを撫でてみると、人の肌とは違うさりさりとした手応えがあった。

「まさか、昼間のアレか……?」

金魚すくいはいしちやいけない。あとから気づいてしまったのなら、決して尾びれには触ってはいけない。

いおを掬い上げるときに触れてしまった魚の体。まさかまさかとは思っていたが、きつとそれが原因だ。脳裏には、今日調べた昔話の結末がありありと思い描かれている。

陸で暮らし、干からびて死ぬか。それとも、魚になって海で暮らすか——

「どうなってもいいように、か」

夏樹はぎゅっと唇を噛み締めて、自分の左腕を見下ろしていた。

翌日、三人は榎木老人の自宅にいた。八畳ほどの仏間に通され、藍色の座布団の上に正座する。つやつやした座卓の上には一輪挿しのガラスの花びんが置かれていて、小さなヒマワリが生けてあった。

いおは相変わらず長袖のパーカーを着込んでいるが、透명한鱗はどんどん体中に広がっているらしい。昨日は隠れていた鱗が、袖口や首回りから覗くようになっていた。顔や手などの分かりやすい場所に出てくるのも時間の問題だろう。

「もう知っているかもしれないが、魚のまぶたを食うほか、五百川くんが元に戻る方法はない。でも、時間がないぞ。なんせ二日後には満月だ」

「満月?」

頭に疑問符を浮かべる三人に、榎木老人は教えてくれた。

なんでも、人魚薬を使いすぎたいおは魚になってしまったが、網で掬ったおかげでひとまず人間の形を保っている状態にあるの

だそうだ。しかし、いおはまだ魚に近いものであるで、次の満月の夜には魚に戻ってしまうのだという。しかしいおが魚に戻った時、「魚のまぶた」を食わせてやれば、今度こそ人間に戻るらしい。月齢カレンダーによれば、満月は二日後の夜であるということだ。

「でも、まぶたはどうやって手に入ればいいのか？」

「当てがある。権木薬局……金魚屋のほうが馴染みがいいか？」

金魚屋のところにいる白い魚、あれを使う」

老人の言葉に、張り詰めていた夏樹とコトの表情がいくらが緩んだ。いおは人間の姿に戻る。それを聞けただけで大収穫だった。

「瞬きするって噂があつたけど、本当にまぶたがあつたんだ」

「だから言つたら、あの白い魚は瞬きするぞつて」

しかし、元に戻るのと聞いたはずの当の本人は、ずっと険しい顔をしたままだ。

「どうした、いお。険しい顔してさ」

夏樹が声をかけると、いおは顔を上げた。表情はずつと変わらないはずなのに、夏樹にはなんだか泣き出しそうな顔に見えた。ややあって、いおはぼつりと、しかしはつきりと聞き取れる声で、言つた。

「そのまま、魚にさせてくれませんか」

夏樹は思わず耳を疑った。コトも同じようで、目玉が零れ落ちるんじゃないかというくらい目を見開いている。爺さんだけは、平静の表情を保つたままじつといおを見ていた。

「何言つてんだよいお！」

「そうだよ、馬鹿なこと言っちゃいけないよ！」

「……二人にしてみたら、馬鹿なことかもしれないけどさ」

いおは落ち着き払った様子で後頭部をぼりぼりと掻いて、視線をすつと手元に落とした。中庭の窓から漏れる穏やかな光が、いおの頬を照らしている。

「本当にそれでいいのか」

「爺さん！」

「爺ちゃん！」

二人はほぼ同時に叫んだ。その声音には非難の色が含まれていないが、もうほとんど悲鳴に近かった。いおは視線を下に落としたまま、きつぱりと言いつつ切った。

「うん、いいです。僕は、魚になりたい」

「そうか」

「明後日となると、色々整理しなきゃいけないものがあるので、ちよつと失礼します」

「おい、いお！ 待てよ！」

「待つてつてば！ いお！」

あんまり時間がないなあ。そんなことをぼやいて、いおは本当に出ていつてしまった。二人が呼び止める声が虚しく廊下にこだまする。

「爺さん、何で！」

「爺ちゃんの馬鹿！ 大人でしょ！ 止めるのが普通でしょ！」

榎木爺さんを糾弾する二人の目は混乱と焦燥を如実に現わしていた。爺さんは残された二人に向き直って、論ずような柔らかい口調で言う。

「お前ら、忘れていやしないか。まぶたのある魚は、元人間だ。大切な人だっているだろう。大切な場所だつてあるだろう。しかしまぶたを取ってしまったら、今度こそ本当にただの魚になってしまう。消えてしまう。いなくなってしまう。お前らは、自分のために誰かを消してしまう選択が、そう簡単にできるのか？」

二人ははっとして口を噤む。そんなふう考えたこともなかった。さらに、爺さんは静かにこう告げた。

「あの金魚はね、店主の娘だ。彼と同じように人魚葉を飲んで、二十年前にいなくなってしまった、その人だ」

昨日いおが女の人と話している夢を見た。あの人が、金魚屋の

娘さんにちがいない。いおを元に戻そうとするのなら、彼女はきっと消えてしまう。でも、そうするより他に手はない。夏樹の中にはいおをそのまま魚にしてやるだなんて選択肢は最初からないのだ。――あなたのせいよ。

夢の中で彼女が言っていたことが、今更になって効いてくる。あの時いおを自由研究なんかで巻き込まなければ。そもそも、人魚伝説になんて興味を持たなければよかったのに。後から後から後悔の念が波のように押し寄せてくる。しかし何をどう後悔したって後の祭りだ。もとはといえば自分で蒔いた種である。なんとか自分でケリをつけなければ。

そうなれば。

ぎゅ、と腕を組むと、左腕の触り心地が随分と違うことに気がついた。夏樹はしばらく呆けたように自分の左腕を眺めていた。

そうか、何も別に、彼女を消してしまうことだけが道ではないのだ。

夏樹はいおを追って、弾かれたように外へ飛び出した。

全力で坂を駆け下りていくと、いおは交差点で信号待ちをしていた。

「いお！」

夏樹は駆け寄って、いおの肩を掴んだ。

「いお、やつばお前戻るべきだよ。ちゃんと話聞こうぜ。あの人が魚になるのが嫌だっていうんなら、それ以外にも、きつとまぶたをくれる奴がいるって」

いおは夏樹を振り返らずに、ずっと道路のほうをみつめていた。歩行者信号が青になる。後ろから足音がして、コトが追いついてきたのが分かった。でも、いおはその場から一步も動かずに、ひとりごとを言うように、ぼつんとこぼした。

「皆、魚いおって呼ぶけどさ。泳げなくなった魚は、どうしたらいいんだろうね」

「泳げなくなつていいじゃねえかよ。泳げないなりになんとかするしかないだろ。お前はいいけど、まるきり魚じゃねえんだぞ」

「……嫌だよ」

「駄々っ子かよ」

「それじゃあどうしたらいいんだよ。これくらいしか取り柄がないのにさ」

「お前の言ってる取り柄が何だか分かんねえけどさ、無くつたって生きてけるよ」

「それじゃあ父さんも母さんも見てくれない、ダメなんだよ。なーんの価値もない。誰も見ちゃくれない。生きてたつてしょ

うがないじゃないか。そんなやつのために、まぶたを取られる人がかわいそうだ」

「いお、そりゃ卑屈が過ぎるつてもんだよ。せつかく、皆が助けやろうとしてるのに」

それを聞くと、いおはイライラして仕方がないとも言うように鼻で笑った。

「助けてやろうって、何様のつもりだよ。本人がいいって言ってるんだからいいじゃん、放っておいてよ。どうせ、夏樹も僕のこと、ちようどいいかと思ってるんでしょ。自分よりできないやつを側に置いてさ、お手軽に優越感に浸ろうってんでしょ」

「は？ 何だよそれ意味分かんねえ」

「だってそれくらいしか、夏樹が僕と仲良くするメリットなんてないじゃないか」

夏樹は鋭利な青い刃物で胸を一突きにされたような気持ちがあった。

歩行者信号がチカチカと明滅を始める。

「メリットで……見損なうなよ。そんなことで俺がお前とつるんではと思ってるのかよー」

「そうだよ！ 最初に僕が会った夏樹はそんな奴だったろ！」

それを聞いた瞬間、刺された穴からマグマのような高熱が噴き

出してきた。顔がカッと熱くなつて、夏樹は思わずいおの胸倉に掴みかかる。いおはそこで初めて、夏樹の顔を見上げた。グツと齒を食いしばつて、親の仇のように夏樹を睨み付けている。

「言わせておけばこの野郎ッ！ お前こそ何なんだよ、葉なんか使つて競技会出やがつて！ 楽しかつたかよ、俺らとのガチ勝負はよ！」

いおの顔がみるみる紅潮してゆき、砕けんばかりに奥歯を噛みしめたのが分かつた。

「仕方ないじゃないか！ そうでもしなきゃ、認めてもらえないんだよ！」

「仕方なくなんかねえよ、この裏切り者が！ そんなに評価が大事かよ！ それで友達切り捨ててるのはお前じゃねえか！ それで水泳だけが取り柄だつて？ どの口が言つたもんだ、笑わせんじゃねえ！」

胸倉を掴む手に、余計力が籠る。

「やつぱり、やつぱりお姉さんだけだよ、僕のこと分かつてくれたの」

「くそつ、可哀想ぶつてんじゃねえよ、この卑屈野郎！」

「やめなつて二人とも！ 夏樹言い過ぎ！」

夏樹が拳を振り上げ、それを見かねたコトが二人の腕を掴んで

間に割つて入つた。コトは一瞬驚いて何かを言おうとしたが、そこにいおの悪言が飛び火した。

「うるさいなあ！ 保護者気取りかよ！ うざいんだよ！」

コトは何も言い返さなかつた。ただじつと、悲しそうな顔でいおを見つめるだけだつた。

「ほんとに、ほんとにさあ、そんなこと思つてたのかよ。友達だつて思つてたの、俺だけです。バカ言えよ、俺がどんだけお前、つもういい、もういい」

夏樹はたまらずその場から逃げ出した。

「ちよつと、夏樹！」

後ろからコトが叫ぶが、夏樹は足を止めなかつた。

走つて、走つて、夏樹は町の診療所のすぐ裏手にある、小さな原っぱに来ていた。草刈りなんかはされていなく、雑草が伸び放題になつて足元をくすぐっている。脇には灰色の鉄塔が建つていて、緑の葉っぱをつけた蔦が絡みついていて。そのすぐ下にはナンバープレートの外れた外国車が数台並んでいた。廃車なのか中古なのかわからないけれど、塗装が剥けて錆の浮いているものやパーツがいくらか足りないものもあった。

日差しは暑い、時折吹く涼しい風が、足元の雑草や木立の葉

を揺らしていた。

「夏樹」

しばらくもしないうちに、コトが追いついてきた。

「いおについてなくていいの」

「いい。たぶん今は何言っても聞いてくれない」

二人は広場に植えてある大きな銀杏の木の下に腰を下ろした。風が吹く度に、白い木漏れ日が地面の上でちらちらと揺れ動いている。二人は無言だった。どちらから何を言い出すわけでもなく、

風が吹くままにさせていた。遠くから、車のエンジン音や保育園の子どもがはしゃぐ声が小さく聞こえてくる。

「俺、そうだったかなあ。いおの言う通りだったら、めっちゃやな奴じゃん」

口火を切ったのは夏樹だった。

「今更気付いた？」

夏樹は言葉を失う。コトはすぐさま「冗談」と言うが、全く笑えない冗談だ。夏樹は額を押さえて深い溜息をついた。そうだなあ、とコトは少し考えると、ふっと思いついたように口を開いた。

「……大型犬」

「は？」

「よく吠えてやたらと噛み付く狂犬を、いおはよく手懐けたな

あって思ってた」

「犬俺かよ」

「うん」

「わんわんわーん……」

抑揚なく吠えてはみたものの、馬鹿らしくなって溜息をついた。

「犬かあ。あーでも犬かも。そうかも」

「忠犬ナツ公物語。はじまりは、三年前のアレ？」

「そう、三年前のアレ」

三年前手ノ町に越してきたばかりの夏樹は、周りのもの全てを見下していた。水泳の授業がはじまると、クラスでいちばん泳ぎが速いと噂されていたいおに水泳勝負を持ち掛けた。二十五メートル、自由形の一本勝負。負けた方が勝った方の言うことを何でもきくという、なんとも子どもらしいオマケ付きの勝負だった。それは水泳の授業中、クラス中の人や、他のクラスの人が見ている前で行われることになった。

結果は夏樹の完敗だった。最初から最後まで、ゆうに五メートル以上の差をつけて、あっさりといおが勝ってしまった。当てが外れて目を白黒させている夏樹に、いおは何の要求もしてこなかった。ただ何の嫌味もなく、「下山君、水泳だけはそんなに得意じゃないんだね」と言うだけだった。それが夏樹にとどめを刺し

たとも気づかずに。

それからだ、夏樹が丸くなったのは。いおが、魚と呼ばれるようになったのは。

「全然敵わなかった。俺なまじコンクールで賞とか取っちゃったからさ、すごい周り見下してたし、俺には何でもできるって思ってた。ここだけの話だけど、前の学校でも、全然友達いなかった」

「いおにあそこで天狗の鼻っ柱を折られたってわけだ」

「圧倒的だった。かなわねえなって思った。もういつそ気持ちよかった。俺ん中で大革命起きた。こいつはすげえ奴だって、初めて誰かに思ったもん。俺、たぶんいおがいなかったらヤバかった。また転校しなきゃいけなかったかもしれないし、大げさかも知れないけど、死ぬか殺されるかしてたかもしれない。そうでなくともすっぱー嫌な奴のまんまだったよ。なんかそう思っただけで、すごい怖くなった」

夏樹は一度そこで言葉を切って、がりがりと頭を掻いた。

「だから、さっきのはすげえショックだった。勝手に薬使っちゃったのも許せない。でもさ、そんな奴だけどさ、魚になっちゃって、いなくなるのは嫌なんだよ。なあ榎木、何であいつは、あんなこと言い出したんだろうな」

乾いた風が吹いて、銀杏の葉がざわざわと潮騒のような音を立てた。その度に、地面に散った光の飛沫がチラチラと揺れる。それをじっと眺めていたコトが、思い出したように口を開いた。

「昔、同じ質問をいおにされたよ。泳げなくなった魚は、どうしたらいいんだろうね、って」

それは、夏樹が引越してくる少し前のことだった。

クラスで飼っていた金魚が転覆病にかかったらしく、ひっくり返ってもがいていた。

金魚にかけられていた言葉は、子どもらしいといえばそうだが少々辛辣で、遊びのように餌をやっていた子どもたちがぱたりと寄り付かなくなった。そんな中、いおはいろいろと調べていたらしく、ネットで見たという魚の車椅子を作って持ってきた。しかし、いおが朝学校についたときには、金魚は既に死んでいた。

中休み、コトが見たのは体育館裏に向かういおの姿だった。何をしているのかと聞けば、金魚の墓を作っているのだという。せつせと地面を掘り返すいおの手は土まみれだった。生き物係でもないのにどうしてこんなことをしているのかと聞けば、少し間があってから、頼まれたのだと答えた。

コトは倉庫から移植ゴテを二つ借りてきて、二人でザクザクと土を掘り返した。金魚を埋めて、土をそつとかぶせて、墓碑の代

わりにその辺に転がっていたタイルを立てた。短くお祈りを済ませると、いおはぼろぼろと泣きだしてしまった。

無理やり押し付けられた仕事なんかしないでいいんだよ、とコトは宥めたいのだが、いおはしきりに首を横に振る。埋葬を押し付けられたのが嫌だったのでも、金魚の死を悲しんでいるのでもなく、金魚が可哀想で泣いていたのだという。少し拍子抜けしたコトに、彼は泣きながらこう訊ねたのだという。

泳げなくなった魚は、どうしたらいいんだろうね、と。

「その時はたかが金魚で泣くなんて、変わってるなあって思ってたんだけど」

「何て答えたんだ」

「何も言えなかったよ。分からなかったから。昼終わりのチャイムが鳴るまでずっとそうしてるから、授業始まっちゃうから帰るって。それだけ。今思えば、いおにとっては、泳ぐことが全部だったのかなって」

「そうかもしれないけど、俺はそれには賛成したくない。泳げないから要らないだなんて」

「でも、どうする？ ああなったら、何を言ったっていおは聞いてくれないよ」

二人の間に、また沈黙が落ちる。夏樹はほぼ無意識に自分の左

腕を撫でた。

「夏樹、腕どうしたの」

しきりに腕を気にする様子に気付いたのか、コトが訊ねる。

「昨日また日焼けした」

「左腕」

しらばっくれてみるが、どうもだめらしい。夏樹は観念して、昨日魚を掬い上げるときに尾びれに触ったことを伝えた。

「普通に見るとただの腕なんだけど、鏡で見ると鱗が生えてる。あ、でも触ると分かる」

コトがこの世の終わりのような顔をしている。

「早く、爺ちゃんに知らせないと」

「いや、まだいいよ。何かの役に立つかも知れないし、大事に取っておこうぜ」

「何言って……ああもう、なんでいつもこいつも！ 強情つ張りどもめ！」

「お前だつて大概だろ」

言い返した夏樹は抱えた膝の頭をぐっと掴んだ。

「一体、どうしたらいいんだろうなあ」

ちよつとだけなら大丈夫だと思った。



どこまでも続く水平線の向こうで、海の青と空の青が溶け合っている。満ち潮はもう少し先だった。ざんざんざんと音を立てながら、穏やかな波が寄せては返しを繰り返す。生ぬるい水が膝の裏をくすぐって、飛沫を浴びてべたべたする腿の間を風がぶわつと吹き抜ける。その度に、小さな半虫が脚に這っているようにむずむずするので、夏樹はざぶんと海の中に身を沈めた。水は相変わらず塩辛いけど、光が透けてキラキラと光っている。

夏樹はそっと、少し遠くにいる家族の様子をうかがってみた。父親が、ぐずる妹を抱き上げて何かやっている。母親もこちらに気を取られて、今はだれもこちらを気にしていない。絶好のチャンス。浮き足立つ心を制して、絶対外すなと言いつけられていた浮き具を外した。シュノーケルとフィンもこっそり外して、近くの岩の上に置いてきてしまった。体ひとつだけで、もう少しだけ深い所に移動する。ちょっと離れると人もまばらで、ここなら好きだけ潜っていられそうだった。

意を決して、夏樹は水の中へ全身を沈める。壁がない。床もない。プールでの潜り方とは全然勝手が違う。顎の下がぐっと押し上げられて、全身の関節が水面へ引つ張られるような感じがする。水を蹴って、かき分けて、水面とは逆の方向へと進んでいく。海底の近くまで来たところで、夏樹は顔を上げた。上も下も、右も左

もない中に、ポツンと放り込まれたようだ。頭の上では、魚たちが悠々と泳いでいた。ペラとか、ハゼとか、イシダイとか、カワハギとか。他にも、名前はわからないけど、赤とか青とか黄色とか、色の綺麗な魚が岩の陰にちらほら見えた。水面からの光を受けて、光ったり、影を落としたりする。それ以外に見えるのは、エメラルドグリーンに輝く海の水だけだった。夏樹はただぼーっと、彼らの泳ぎ回る姿を見つめていた。

こぼ、と口から泡が溢れた。丸くつぶれたそれはどこかを目指して、光を反射しながら遠ざかっていく。

綺麗だと思った。遠くからやって来る波に押され、近くでわだかまる水流に流され。目で追っているうちに、泡は光に吸い込まれて消えてしまった。あ、と思つて手を伸ばしても、もう届かなかった。

いつの間にか、周りの魚もどこかへ行つてしまつていた。何も聞こえない、静かな水底で夏樹は急に、今自分が一人ぼっちでいることに気づいた。それから、なんだかひたすらに泣きなくなつた。不思議とさみしいとは思わなかった。なんだかよく分からないう、走り出したいような、叫び出したいような、それなのにとても穏やかな気持ちで鳩尾の底から湧いてきて、血と一緒に体の中ををぐるぐると駆け巡ってゆく。

そこに誰かがやってきて、やさしく頭をなでてくれた。白い手首に、赤い珠の一つだけついた腕飾りをしているのが見えた。ゴールのの中で、熱くなった目の端から、海水とよく似たしよっぱい水がこぼれ落ちるのを肌で感じた。

布団の上で目覚めてから、今のが全部何かの夢だということに気がついた。でも、瞬きすると熱い水がじわりと滲み出てくるし、胸の辺りにはまだ何か分からない感情の残りがくすぐずぶっている。ただ、そのくすぐぶりに、憧憬にも似た懐かしさを感じていた。

夏樹はしばらく仰向けになったまま、幸福感の余韻に浸っていた。このまま朝焼けが見られればいいな、と、まだ明けない東の空を思いながら目を閉じた。

「いおくん、きみさ」

「うん」

「魚になりたいんだってね」

「……うん」

水の底で、お姉さんが、いつものように髪をゆらゆらさせながら聞いた。

「死にたいの？ それとも生きたくないの？」

「……分かんないや。お姉さんはどうだったの」

「私は、……私は生きたかった。生きたかったから魚になった。人間に向いてなかったなと思ってたから」

結局、魚も向いてなかったけど。お姉さんはそう付け加えた。

「泳ぐのだけ、他の子よりちょっと上手かった。そしたらみんな認めてくれた。輪の中に入っていいような気がした。はやく、もっとはやく、誰よりもはやく、泳がなきゃ」

お姉さんは歌うように節をつけた。綺麗な声だった。

「こんなもの使わなくなつて、いおは結構大事にされてるよ。あの二人とか」

お姉さんはほぼ空になってしまった人魚葉のピンを振って、大して興味もなさそうに放り投げた。手を離れたピンはゆつくりと弧を描いて、音もなく砂地に転がった。

「……」

「きみは、人間向いてると思うなあ」

「分かんないよ……」

——泳げなくなつていいじゃねえかよ。泳げないなりになんとかするしかないだろ。

——お前はいおだけど、まるきり魚じゃねえんだぞ。

鬱陶しいと思っていた夏樹の言葉がなんとなく胸を過った。

ばうっとしているうちに、ぽつ、ぽつ、とピンク色の球がいお

の顔の横をかすめた。珊瑚の卵だ。満月でもないのに、近くのサンゴ礁が産卵を始めたらしい。天高く、吹き上がる風に乗っていくように、水底から水面に向かって、無数の球がゆらゆらと上っていく。

そのうちの一つに託すように、いおはそつと呟いた。

「お姉さん、まぶたをちようだいっていったら、怒る？」

お姉さんは黒い目をしばたかせて、緩く笑った。

「そうねえ。怒るかも。それで泣く。存分に泣いたら、いおにあげるよ」

「どうして」

「さて、どうしてか……。いおが可愛いから、かな」

「はぐらかさないでよ」

「あら心外。きみにならあげてもいい。私はきみが大事なもの」

「きつと、お姉さんは僕じゃなくても同じことを言うよ」

お姉さんが大きな岩に寄りかかりながら、面白そうにくすくすと笑った。

「うん、きつとそう。ここに來たのがあの夏樹って子でも、私は同じこと言うと思うよ。でも、ここにはきみが來た。今いるのはきみだ。運命ってそういうことだよ」

「どうして今ここで夏樹なのさ」

「あの子も今は半分魚だよ。明後日には、彼もこちらの仲間入り。昨日はここにも來たし」

「嘘。夏樹が？」

「きみの尾びれに触ったらしい。不注意だねえ」

「……」

動揺するいおをよそに、お姉さんはすくつと立ち上がって衣装替えを始めてしまった。頭、肩、膝の順番で自分の身体に触れていくと、いつもの服があつという間に袴姿に変わっていく。最後に踵にちゃんと触れると、裸足だった足がすつきりした編み上げブーツに変わっていた。

「さて、きつとこれでお別れだ。明日は母さんのところに挨拶に行くから。そう、これだけは言っておかなきゃ。私はきつと、あと十年しないうちに寿命で死ぬよ。きみは水の底で寿命がくるまでひとりぼっちさ。さびしんぼのきみに、耐えられるもんかね」

じゃあね、と手を振ると、お姉さんは水に溶けるように消えてしまった。

いおは、ひとりぼつんと水の底に取り残されてしまった。ふわふわと流れてゆく珊瑚の卵を目で追いながら、いおはしばらくその場を動くことが出来なかった。

翌日、いおは夏樹を呼び出した。場所は榎木老人の家で、爺さんと婆さん、コトまでその場に勢ぞろいしていた。全員が仏間に正座して座っていて、いおとその隣にだけ、藍色の座布団が置かれていた。

到着した夏樹が「何」と訊ねると、いおは夏樹に白い封筒を突きつけた。夏樹は座りながらその封筒を受け取った。開けてみると、果し状と書かれた紙が中に入っていた。

「決闘だ。僕と水泳で勝負しろ。百メートル自由形一本勝負。負けた方は勝った方の言うことをなんでも聞く」

夏樹は思わず息を呑んだ。三年前、夏樹がいおに吹っつけたあの勝負と同じだ。こんな時なのに、口の端が勝手に上がってしまった。そうだ、勝てばいいのだ。勝って、いおに自分のまぶたを食わせればいい。それでいおは元どおりだ。

「ふうん。いおに勝てば、俺の好きにしていってこと？」

「そうだよ。ただ、夏樹が勝てればの話だけど」

「勝つさ」

二人は既に一触即発の様相を見せていた。何とか止めさせようとするコトを、榎木婆さんがそっと引き止める。

「こつでもしなきゃ聞かないでしょう。二人とも強情っ張りなん

だから」

「でも」

「任せましょう。当人同士の問題なのだから」

コトはじりつと唇を噛みながら二人を見つめるはかなかった。

「双方合意でよろしいな。立会人は榎木清次郎が務める」

今まで黙っていた爺さんが、凜と張った声で告げた。

「勝負は明日の深夜。二十三日に手ノ町小学校まで来られたし。異存はないな」

夏樹といおが返事をする、銘々果し状の表に拇印を捺して、その場は解散となった。

その日の夕方、母が仕事から帰ってくると、夏樹は進んで夕飯の手伝いを申し出た。

「どうしたの夏樹、珍しいじゃない」

「いや、たまには親孝行しねえと思って」

「いやー明日は雪が降るね。じゃあ、お米用意してもらおうかしら」

シンク下からステンレスの米研ぎザルを出すと、二合計って米を研ぎはじめ。水が流れる音と、ジャツ、ジャツ、と、米の擦れる音がキツチンに響く。換気扇の回る音、規則正しく刻まれる

包丁の音。それに紛れるように、ぼつり、と夏樹が訊ねた。

「……母さんはさあ、父さん単身赴任で寂しくないの」

カボチャを短冊に切りながら、夏樹の母はうーん、と考えるような素振りを見せた。

「まあ、どんなに忙しくても月に一回は帰って来てくれるしねえ。それに夏樹もいるし」

米の水を切りながら、夏樹はそれに曖昧な返事を返すことしかできなかった。明日の結果によつては、夏樹は帰って来ないかも知れないのだ。何と言ったものだろう。それとも何も言わずに行くべきだろうか。色々なことが頭を過つて、言わなければならないはずの言葉が何一つ出て来ない。

「行つておいで」

「え」

夏樹の葛藤を見透かしたように、夏樹の母は笑った。

「冒険に出る男の子の顔してる」

「なんだそりゃ」

「これ、昔から一度言ってみたかったのよ」

「はあ」

「何をコソコソやってるんだか知らないけど、待つてるから」

すぐ隣でまた何かを切りはじめたような規則正しい音がする。

今、夏樹はまともに母の顔を見られなかった。しかし、それでもいおを連れ戻すという決意は揺るがない。夏樹は計量カップをぎゅつと握りしめたまま、その中に落ちていく水道の水をじつと眺めることしかできなかった。

一方、コトは解散してから榎木老人の家に居座っていた。難しい顔をして、何かを考え込んでいる様子だった。

「琴子、座布団敷いてあげるからいったん退きなさい」

座卓に肘を突いて手を組んでいたコトは、ハッとして榎木老人を振り返った。

「爺ちゃん、魚のまぶたつて、どっちを食べればいいの？」

「どっちつて、何だ？」

「右目と左目」

「両方だ」

それじゃあ片方だけ食わせるっていうのは無理か。ぼそりと呟くと、コトは立て続けに質問をぶつけた。

「まぶたが片方しかない魚はどうなる？」

「魚としては、不完全だな」

「人としては」

「不完全だ」

「そういう資料、残ってる？」

「さあ、俺は聞いたことがねえ」

コトは弾かれたように立ち上がると、カバンを引っさげて玄関に向かった。

「文庫蔵の中、開けてくれる？」

「お前、あの中全部探す気か」

「友達の一生掛かってんだもん、ここで手は抜けないよ。それに、まだ明日の深夜まで三十時間はある」

文庫蔵はおいそれと開けられるものでもないし、その中で三十時間も資料を探し続けるなんて無茶苦茶だ。しかし、コトは頑としてやるというて聞かない。夏樹とおも頑固ではあるが、コトも大概だ。榎木の爺さんはふう、と大きな溜息をつく。

「我が孫ながら……まあいい。手伝う」

「ありがと、爺ちゃん」

コトはそれだけ言うと、駆け足で家を飛び出していった。小さな後ろ姿を見送ると、爺さんはどこかに電話をかけた始めた。

墨を流したような黒々とした夜空に、大きな満月がぼつかりと浮かんでいる。

あつという間に、決闘の夜の夜がきた。空には所々うろこ雲がかかっている。日が沈んでいくらか気温は下がっているものの、まだまだ蒸し暑い。蛍光灯には甲虫や蛾が集まって、草むらからはコオロギやケラの鳴く声が聞こえてくる。

「おう、来たな」

「そりゃもちろん」

学校の裏門前で、一番乗りに到着した夏樹が声をかけると、暗がりの向こうからいおが現われた。

「門限は」

「そんなん気にしてたら来られないだろ」

「確かに。でも戻ったときが大変だ」

「もう勝ったつもりかよ」

「おう、勝つぜ」

既に臨戦態勢のやりとりを交わしていると、どこか疲れた様子のコトと榎木爺さんがやってきた。コトは小さな水槽を抱えていて、そこには白い大きな金魚がひらひらと泳いでいた。

全員揃うと、プールの裏手にある林から、フェンスの穴を潜ってプールサイドに侵入した。昔ここにわき水が湧いていて、ピオトープにしようとした跡地なのだと先生が説明していた場所だった。

プールサイドはシンとして静かだった。さすがにポンプ室も止まっているらしく、今は虫の声以外何も聞こえない。乾いたプールサイドはいつも以上にチクチクと足の裏を刺激して、冷めかけのフライパンのような生ぬるさを擁している。二十五メートルのプールは、ほぼ夜闇の中に紛れてしまっていた。時折風が吹くと小波が立って、水面に映った白い光を揺らしていくのが分かる程度だ。

いおと夏樹は、一も二もなく服を脱ぎ捨てると、下に穿いていた水着一枚になった。夏樹はどぼんと頭まで水に浸かると、軽く体を動かしてウォーミングアップを始める。大して動いていないのに、何だか今日は水が体によく馴染んで、一通り泳ぎ終わったときのような充足感すら感じる。

ちらりといおの方を窺い見ると、全身の皮膚から生えた鱗が白い月明かりに反射してきらきらと煌めいていた。それはすでに顔の皮膚にも及んでいて、タイムリミットに近いことをひしひしと感じさせる。

「そろそろいいだろう」

樫木爺さんの一言で、二人とも水から上がった。プールサイドに点々と残る足跡が光る。

ふと夜空を見上げると、星が見えない代わりに、大きな満月が

こちらを見下ろしていた。そこにうろこ雲がかかって、空を埋め尽くす黒い大きな魚の鱗に、一枚金の鱗が混じっているようだった。

二人は飛び込み台に上がる。今水面を照らすのは、いくつかの外灯と月の光だけだ。

夏樹は大きく息を吸うと、深く深く吐き出した。

「それでは、いざ尋常に。用意」

爺さんが宣言すると、二人とも台の上に構える。全身を引き絞った石弩のようにしならせ、全神経を研ぎ澄まして、爺さんの声だけに集中する。

「始めっ」

掛け声とともに、二人の体は放たれた矢のように飛び出していった。

競技形態は百メートル自由形。二人が最も得意としていた種目だ。泣いても笑っても、百メートル先に泳ぎ切った方の勝ちになる。

跳んだ二人は水面に浅く突き刺さるように着水した。水中に潜った二人は、そのまま勢いを殺さないようドルフィンキックで水面近くまで上がってゆく。最初に上がってきたのは夏樹だった。力強いストロークと深いキックで、水しぶきを上げながら進んでいく。

一方いおは潜水艦のようにしばらく身を潜めていたが、水面に浮上した瞬間、伸びのある泳ぎを見せた。いおの泳ぎは夏樹に比べたらおとなしいものだけれど、遠くの水を思いつきりかき集めて、後ろに押し流していく。水面を割って進む夏樹とは打って変わって、いおは水の流れに乗るように泳いでゆく。

一度目のターンはほぼ同じタイミングだった。しかし、帰りは少しばかり夏樹がリードしている。そのままじわじわと距離を広げてゆき、半身以上の差をつけたかと思うと、いおも次のターン後の伸びを利用し負けじと食らいついていく。

接戦だ。大接戦だ。抜きつ抜かれつ、追いつ追われつをくり返して、二人の順位は秒を追うごとにコロコロと変わっていく。

最後の折り返しを過ぎ、二人の泳ぎにスパートがかかる。速度はほぼ互角。しかし、一歩だけ夏樹が先を泳いでいる。バタ足の音と上がる水柱が大きくなって、夏樹が更にスピードを上げた。しかし、ゴールまで後半分というところで、いおが更に追い込みを仕掛けてきた。息継ぎを完全に捨てて、ひたすら手足を動かして壁に直進していく。じりじりと追い上げていつて、いおと夏樹が完全に並ぶ。

陸の二人は、一言も発することなく勝負の行方を見守っていた。最初に壁に手を着いたのは——いおだった。

僅差で夏樹も追いつき、水面から顔を上げる。二人とも肩で息をして、髪の前からばたたと水滴を垂らしている。

「ははっ、また、一番だ」

コースロープにもたれるようにして、いおが夏樹を見上げた。

「チクシヨ、最後まで、勝ち逃げかよ」

「約束だからね。僕が決めたことに口出しはナシだよ」

二人が陸に上がると、急に息苦しさで襲ってくる。全身が怠くて、鉛でも入っているかのようにとんでもなく重たい。夏樹はたまらず、ごろりとブルサイドに大の字になった。

「いお、どうする」

榎木の爺さんが促す。いおは夏樹と、陸の面々をぐるっと見渡すと、静かに口を開いた。

「僕は——」

「待つて、待つていお、あのね……っ」

コトが割って入ろうとするも、いおは首を横に振る。

「夏樹を、人間に戻します」

いおが宣言すると、夏樹が飛び起きた。

「いお、なんでそれ……」

「お姉さんが言ってた。僕らのこと覗いてたでしょ」

「はっ、覗いてなんかねえって」



慌てて否定するが、夏樹の顔は耳まで真っ赤だ。

「ただ、使うのは僕とお姉さんのまぶた。それぞれ右目と左目一枚ずつ」

次に驚いたのはコトだった。榎木爺さんも、片方の眉毛をはね上げている。

「どうしてそれ知ってるの？ 資料の中にも、二件しか残ってなかったのに」

「知ってるのも何もさ、夏樹も魚になるって聞いたたら、こうするほか思いつかなかったよ。片方ずつだと、何か不都合あるのかな」

「……分からない。ずーつと昔に、片方ずつのまぶたを食わせたって記録だけ残ってた。その後どうなったかは、分からない」

「両方まぶたが戻ってれば、とりあえず夏樹は人間に戻る。片方ずつになった魚がどうなるかは分からないけど、確実に一人いなくなってしまう方法より、こっちのほうがずっといい」

「二人ともダメだったときは……？」

絞り出すように訊ねたコトに、いおは明日の天気でも話そうに答えた。

「その時はその時さ。でも、もしかしたら二人とも陸に戻るかもしれない。賭けてみたいんだ。勝者の希望ってやつ」

「勝ったのはお前なんだ、俺はもう何も言わねえよ」

「話が早くて助かるよ」

そう言うのと、いおは改まった顔つきで夏樹に向き直った。自然と夏樹の背筋も伸びる。

「二昨日はごめん。許してとは言わないけど、言えなくなるのは嫌だから」

「俺も、酷いこと言って悪かった。でも薬のことに関しては謝らねえぞ。言葉が悪かったのは認めるけど」

夏樹らしいや、といおは困ったように笑った。それからコトにも向き直る。

「コトも、あんなこと言っちゃってごめんね。一番嫌な役まわりだったでしょ」

「いいよ、いいからさ、そんな最後みたいなこと言わないでよ」

コトはいおの鱗だらけの手を取って、俯いてしまった。夏樹の位置からチラリと見えた彼女の表情はくしやりと歪んでいて、今にも泣き出してしまいそうに見えた。

「いいんだな、いお。夏樹を人間に。まぶたはいおと睦美から一枚ずつ」

榎木爺さんの問いかけに、いおは大きく頷いた。それどころか、顔をほころばせて。

「睦美っていうんだ、お姉さんの名前」

むつみ、むつみ。いおはあめ玉を転がすように何度もお姉さんの名前を呼んで、嬉しそうに笑った。

後日。怒濤のような夏休みが終わって、新学期になった。クラス中、久しぶりに会う友達とのおしゃべりで浮き立っている。教室の後ろに備え付けられたロッカーの上には、各人の夏休みの自由研究が所狭しと並べられていた。

結局、あの人魚葉レポートは例の手記と共に破棄されることになった。あれだけの大事を起こしてしまったのだから、夏樹も首を縦に振らざるを得なかった。最初に爺さんたちがそうしていたように、きつとあれらは記憶の海に埋もれさせてしまった方がいいのだろう。

「おい榎木、帰りに金魚屋寄ってかないか」

「こら、教室で堂々と寄り道の話をする馬鹿があるか」

夏樹の後頭部をコトがぱしんと叩く。それを見た幾人かの女子が「コトがまた男子いじめてるー」とやじを飛ばす。振り返って「いじめてなんかいないよ、ねえ？」と夏樹に振れば、夏樹はそれに曖昧な返事を返してさらに後頭部を叩かれていた。

「な、お前も行くだろ」

夏樹が後ろの席を振り返ると、「うん」と嬉しそうな返事が返っ

てくる。

後ろの席ではいおが頼杖をついて笑っていた。その腕には、目の粗い金属用の鰓を押し付けたような跡が残っていた。

あのあと、いおと夏樹は零時になるのと同時に魚になってしまった。榎木爺さんとコトは、二匹の魚からそれぞれ右目と左目のまぶたを取った。コトは千切り取ると聞いて戦々恐々としていたのだが、魚のまぶたは指で触っただけでぷつりと取れてしまった。それを魚の夏樹に食わせると、次の瞬間にはプールの中に見慣れた姿の夏樹が立っていた。左腕を覆っていた、鏡にしか映らない白い鱗は、すっかりなくなってしまうていた。

残ったのは、まぶたを片方なくした魚たちだった。夏樹は祈るような気持ちでいおを網で掬った。しかし、陸に上げられた網の中では白い魚がびちびちと跳ねるばかりだった。ダメかと思ったそのとき、魚は苦しうエラを膨らませると、凄まじい跳躍で網の中から飛び出した。そのままプールサイドに叩きつけられ、魚はまるで空気に溶けるように消えてしまった。代わりに、そこには人間の姿をしたいおが座り込んでいた。

夏樹とコトは飛び上がって喜んだ。しかし、片目の魚は人としても魚としても中途半端だったらしく、いおの体のあちこちには、鱗の跡が残っていた。運良く顔の目立つ箇所には残らなかったも

の、額の端や首筋、腕や背中といったところにはざらざらとした鱗の跡が残ってしまっていた。医者に診てもらって、生活に支障はないだろうということで、今もそのままになっている。何より本人が、これは教訓だからといってそのまま残しておくことを望んでいるのだった。

それと、いおはすっかり泳げなくなってしまっていた。泳法の型がどうかという問題ではなく、まるで水に嫌われているかのように、水に入ると勝手に体が沈んでしまうのだ。泳ぎ方も、息継ぎの仕方、さっぱり分からなくなってしまうたといおは言っていた。その横顔は少しだけ寂しそうだったが、どこことなくすつきりしているようにも見えた。

放課後、コトにぐちぐち言われながらも金魚屋に向かうと、「いらつしやい」と女の人の声が飛んでくる。文婆さんの声とは違う、涼やかな若い女の人の声だ。

カウンターの奥には、長袖の服にストールを巻いた、それはそれはきれいな女の人が座っていた。腰まであった長い髪は、肩の辺りでふんわりと切り揃えられている。

「むつまさん！」

いおは嬉しそうにお姉さんに近寄ると、今日あったことを話し

だした。最近、いおと金魚屋に寄るとこれがお約束になっていた。コトは「またか」と目頭を揉んだりしている。

お姉さんも、いおに拘われて彼と同じように人の姿に戻っていた。初めは嫌がっていたのだが、いおのたつての願いもあり、そのまま陸にとどまることになった。ただ彼女の言うことには、いおと彼女は満月の日の夜には海へと帰らなければならぬらしい。人間としても、魚としても不完全な彼女たちは、満月になると魚の姿に戻ってしまうのだそうだ。だからその日は朝日が昇るまで、海の中で過ごすのだという。

次の満月は十日後だ。樫木爺さんは大潮の海の危険を口が酸っぱくなるほど説いていたのだが、いおは二人で行くならきつと大丈夫だと笑っていた。何をのん気な、と思わないわけでもないが、夏樹も不思議とこの二人なら大丈夫だという確信を得ていた。

「それで、今日は何にする？」

夏樹の視線に気がついたのか、いおと話しながらもお姉さんが聞いてくる。

夏樹は少し悩んだあと、悪戯っぽく笑うと、こう言った。

「金魚のまぶた、ください。……なんてね」